

シリア 崩壊文明は再び蘇るだろう

ムーイン・ラバニ

インターナショナリスト 360 2024 年 12 月 30 日

<https://libya360.wordpress.com/2024/12/30/syria-a-fallen-civilization-that-will-rise-again/>



デイル・エズールにおけるシリア・キリスト教会の破壊 2019 - photo: ヴァネッサ・ベリー

シリアは古代の多元主義文明として滅びないという最初の兆候がある。

[Mouin Rabbani](#) on X. シリアの波瀾万丈の歴史をカバーするスレッド：

シリアの最近の動向についてスレッドを書き始めたが、結局、この国の非常に長い歴史を掘り下げることになった。この第一回目は、第一次世界大戦までのシリアの歴史を要約してみた。興味を持たれた方のために、さらに読み進めるためのアクセスしやすいテキストをあちこちに紹介した。関連する段落の末尾に括弧で囲んである。

[私のメモ - リンクとビデオも追加しました]。

2024年11月27日から12月8日にかけて、シリア政府が予期せぬ急速な崩壊を遂げ、61年間続いたバース党の支配が突然終わりを告げた。その影響は、第一にシリアにとって、そして地政学的な影響を及ぼす可能性のある、より広い地域にとっても、激震的なものになると予想される。どうしてこうなったのか。

アメリカのニューイングランドや中国の湖北省とほぼ同じ大きさのシリアは、世界最古の文明の産物である。首都ダマスカスはバラダ川沿いに位置し、地球上で最も古くから人が住み続けている都市の最有力候補である。シリア第2の都市でありながら、様々な場面で名を馳せた中心都市であるアレッポは、クウェイク川沿いに位置し、最古の都市を争う数少ない競争相手のひとつである。

イドリブはさらに古く、紀元前9千年紀（約1万年前）に初めて定住したと言われている。定期的に放棄され、再定住したが、前千年紀に再びオスマン・シリアの綿花、オリーブ油、石鹼生産の中心地として再興した。オロンテス川（アシ川）に支えられたホムスとハマは、紀元前3千年紀に定住した。シリアの砂漠に位置し、オアシスに育まれた古代の交易拠点パルミラ（タドムール）もまた、数千年の歴史を持つ。

紀元3世紀、アラメ人とアラブ人の混血とされる女王ゼヌビヤが、当時地中海一帯を支配していたローマ帝国に反旗を翻し、歴史にその名を刻んだ。ゼヌビヤ女王は自らを女帝と称し、アナトリア中部から上エジプトに至る領域を支配したが、ササン朝ペルシャを領土に加えようとする途中でローマの遠征軍に捕らえられた。

数千年にわたり、シリアの土地は息をのむほど多くの文明、文化、宗教、宗派、カルトを生み、育み、物質文化、経済関係、国家運営、科学、芸術の革新をもたらしてきた。そのほとんどが、現代シリアに何らかの足跡を残している。

[トレバー・ブライス著『古代シリア』（2014年）は、古代シリアをよく紹介している。『A Three-Thousand Year History』（2014年）は、古代シリアについての良い入門書となっている。[特定の都市の歴史については、例えばコリン・サブロン『ダマスカスへの鏡』（1967年）やフィリップ・マンセル『アレッポ：シリアの偉大な商都の興亡』（2016年）を参照されたい。]

今日に至るまで、シリアは中東で最も異質な国家のひとつである。人口はアラブ系が中心で、クルド人、トルクメン人、サーカシア人、アルメニア人、アッシリア人、エジディー人のコミュニティもある。宗教面では、イスラム教徒はスンニ派が多いが圧倒的ではなく、アラウィー派、イスマーイール派、シーア派もいる。かなりの数のドルーズ教徒に加え、シリアには大規模で多様なキリスト教徒がいる。その約半数がギリシア正教、残りの半数がシリア正教、その半分弱がアルメニア正教で、残りは多種多様な宗派を信仰している。[ウィリアム・ダリンブル著『聖なる山から』（1999年）は、この非常に豊かな多様性について魅力的な説明をしている。

シリアのカラムン山脈にあるマ・ルラ村とジュバディン村は、継続的に使用されてきた最古の言語のひとつであるアラム語が、今も母国語として話されている地球上で唯一の場所である。

かつて繁栄していたシリアのユダヤ人は、他のシリア人と同様、19世紀に西方へ移住し始めた（エジプトとアメリカ大陸が主な移住先だった）。1990年代初頭までに、コミュニティは約4,000人まで減少し、そのほとんどは1992年に去った。シリア系ユダヤ人の約40%はイスラエルに移住し、その他のほとんどはアメリカとアルゼンチンに移住した。

シリアのさまざまなコミュニティは、レバノンと同様、特定の地域に集中する傾向があるが、決して互いに孤立して生活しているわけではない。事実上、すべてのコミュニティがシリアの主要都市、小さな人口集中地区にも存在している。

中東で最も洗練された都市文化を誇るシリアには、数千の村があり、人口の約半分がそこで暮らす。ベドウィン部族は今日、その大部分がシリアの農村部内または周辺部に定住しており、しばしばイラク、ヨルダン、アラビア半島に広がる大きな連合体の一部となっている。

「シリア」という言葉は一般にアッシリア（アッシュール）に由来すると考えられており、その領土は長期にわたってアッシリアの支配下にあったが、実際にはアッシリアはメソポタミアを中心としていた。「シリア」が当初、ユーフラテス川以西の地域をメソポタミアのアッシリアと区別するために使われたのか、あるいは他の何らかの理由で使われたのかは、いまだ不明である。

やがてシリアまたはシリアの土地、しばしば大シリアと呼ばれる地は、現代のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、占領下のパレスチナ地域、トルコの一部、そして場合によってはキプロスも含む地域を指すようになった。アラビア語では、ビラド・アル＝シャムは大シリアを指し、アル＝シャムはシリアまたは口語ではダマスカス（正式にはディマシュク）を指す。

肥沃な三日月地帯に位置するシリアは、動物の家畜化、農業、定住生活が初めて登場した地域のひとつである。その最初の文明は、インド・ヨーロッパ語族とセム語族のさまざまな言語を話していた。後者のうち、アモリ語を話す部族、都市国家、王国は前3千年紀の間にシリアの大部分に定着し、ダマスカスを含む中央シリアの大部分を支配したアラム語を話す後継者が続いた。

[最初の代理テロリストによるシリア侵攻の際のシリア・アラブ馬の盗難に関する私の記事は、[ここで読むことができます](#)]

[以下のビデオは、ブリーダーであり歴史家でもあるバジル・ジャダーンによるシリア産アラビア馬の歴史である。]

シリアの土地は広範囲に耕作され、シルクロードを含む重要な海上・陸上交易路に面していたため、さまざまな支配者にとって大きな富の源泉であった。当然のことながら、古代にはその全部または一部が、アッシリア、バビロニア、エジプト、ペルシャ、アレクサンダー大王などの地域勢力によって繰り返し征服された。彼らは時に現地の支配者を自国の支配者に置き換え、時には現存するエリートたちを国外追放することもあったが、多くの場合、貢ぎ物や兵士、さまざまな商品やサービスと引き換えに、現存する指導者たちを臣下として保持した。

前3世紀、シリアはヘレニズムのセレウコス帝国の一部となり、アンティオキアに首都を置いた。この時代、ギリシア語やギリシア文化は、ギリシアからの移民によって増強され、シリア全土に広がり、特にエリート層の間で広まった。この影響は、セレウコス朝滅亡後も数世紀にわたって残り、同様にヘレニズム的なビザンチン時代にも続き、シリアが7世紀にイスラム教徒の支配下に入った後も長く続いた。

前83年、セレウコス朝はアルメニアのティグラン大王に取って代われ、その20年後にローマにシリアを奪われた。ローマ帝国は、シリアの富と権力を主張するさまざまな勢力の間で続く内紛に終止符を打ち、自国の優位を確立し、ペルシャから西に帝国を拡大していたパルティア人を抑えるために、前64年にシリアを併合した。

シリアはローマ帝国で最も生産性の高い地方のひとつであったので、シリアの貴族が何度も皇帝の座に就くなど、ローマの要職に就いていた。紀元1世紀末から2世紀初頭にかけてローマを支配したセヴェラン朝の家長ユリア・ドムナは、アラブ・ローマの太陽神エラガバルに帰依するエメサ（ホムス）の裕福なシリア系アラブ人司祭の家系の出身だった。

自分が女帝の地位を獲得し、大きな影響力を行使したことに加え、彼女の2人の息子と他の数人の親族が皇帝になった。2世紀半ばに統治した皇帝フィリップ1世（マルクス・ユリウス・フィリッポス）は、アラブ人フィリップとしても知られ、現在のヨルダン国境に接するスウェーダ地方のシャハバ出身だった。フィリッポスはキリスト教に寛容であったため、ローマ皇帝として初めてキリスト教を受け入れたのは、翌世紀のコンスタンティヌスではなく、フィリッポスであったという説が後に有力となる。

4世紀に始まったビザンチン時代、シリア州の富はエジプトに匹敵するほどだった。一部の歴史家によれば、この時代、「シリア」はアラム語を話すキリスト教徒を特に指すようになり、ヘレニズム的で主に都市部に住む隣人とは区別されるようになった。ギリシャ語と同様、アラム語もイスラム時代まで、特に農村部で広く使われていた。少数の例外を除いて、アラム語は話し言葉というよりむしろ典礼語となった。

[以下はテレグラム・チャンネル[エネミー・ウォッチ](#)からの投稿である。アラム語はシリアのキリスト教の町マールーラで今も教えられている。現在、HTS系の宗派勢力によって再び攻撃を受けている。]

シリアのクリスチャン、アブ・ジョージが心臓発作で亡くなった。彼は、私たちが動画を共有した人だ。とても貧しく、農場はテロリストに略奪され、孫はイスラエルとトルコのテロリスト（ジュラニのグループと同盟）に目の前で殴られた。マールーラ出身で、イエス・キリスト（A）の言語である西ネオ・アラム語で主の祈りを唱えていた。これは、イスラエルの聖戦士たちが彼と彼の家族に2日前にしたことである。

ローマ帝国がシリアの支配権をペルシャのパルティア人に奪われたのと同じように、ビザンチン帝国とササン朝の後継者たちの間でも、シリアの支配権が争われた。コンスタンチノーブルの皇帝たちは、2世紀にマリブ・ダムが決壊した後、イエメンから北上してきたアラブ系キリスト教徒の部族であるガッサン朝を、大シリアの大部分を支配し、その東部辺境と関連する交易路の防衛者に任命した。

3世紀初頭に誕生したガッサン朝王国は、当初ゴラン高原のジャビーヤに都を置いたが、後にハウランのデラー南東のボスラに都を移し、イスラム教徒がシリアを征服するまで3世紀以上続いた。その戦いの多くは、ササン朝ではなく、むしろササン朝のラフミード朝との戦いとなった。

ラフミード朝は、イラク南部とアラビア半島東部を網羅するアラブ・キリスト教王国を築いた。コンスタンチノーブルの信仰と神学的教義を共有するヘレニズム化したガッサン朝とは異なり、ラクミドは対立する東方教会に属し、教会を支持するゾロアスター教のササン朝と同盟を結んでいた。

ビザンツ帝国とササン帝国の間で、またガサーン朝やラフミード朝が両帝国のために戦った、互いに消耗し合う数々の戦争は、7世紀にヒジャーズで生まれた宗教と政治の急速な拡大の決定的な要因となった。これを足がかりに、イスラム・カリフは100年あまりの間に、南フランスからインド亜大陸、中央アジアの東端まで領土を拡大することになる。

[ホアン・コールはその画期的な著書『ムハンマド』（2020年）の中で、この帝国の対立と、ムハンマドが後に最初の妻となる実業家ハディヤのために商人としてダマスカスを訪れ、シリアでキリスト教徒やユダヤ教徒と交流したことが、彼の宗教的発展にどのように役立ったかを探っている。

前述したように、アラブ人とアラビア語話者は、シリアが630年代にアラブ・イスラムの支配下に入るはるか前から、シリアの人口モザイクの一部であり、パルミラ、ホムス、ハウランの地域にすでに定着していた。実際、636年のヤルムクの戦いなど、イスラムの武将ハリド・イブン・アル＝ワリードが率いたシリア征服作戦において、シリアの主な擁護者はアラブのガッサン朝人であり、彼らはすでに何世紀も前からシリアに住んでいた。

[イスラム教徒による大シリア征服の初期の記述については、*Hamada Hassanein and Jens Scheiner, The Early Muslim Conquest of Syria: The*

Early Muslim Conquest of Syria: An English Translation of Al-Azdi's Futh al-Sham (2021)]を参照。

このような現実には、イスラエルがアラブ（シリアを含む）の領土で行ってきた明白な（かつては自称していた）植民地支配から目をそらすために、最近になってシリアや他のアラブ諸国で「アラブの植民地支配」があったと主張する人々にとって、いささか難題である。もしアラブ人がシリアにおける植民地篡奪者であったとしたら、イスラエルに対する「反植民地抵抗」を主導したのもアラブ人（ガッサン朝）であったことを、イスラエルのお調子者たちはどう説明するのだろうか。

イスラエルの現代のやり方を免罪するために展開される愚かな極論は、さらに、イスラム教徒の征服後、シリアの現存人口は、イスラエル支配下のパレスチナ人やゴラン高原のシリア人とは対照的に、追放も絶滅もされなかったという現実を説明していない。シリアへのアラブ系移民が現地の人口を上回ったという証拠も存在しない。むしろ、数世紀の間に、この地域のアラム語とギリシア語を話す人の大多数は、アラビア語を共通語として、最終的には母国語として採用するようになった。

同時期、圧倒的にキリスト教徒が多いシリアの住民の大半とユダヤ人の多くは、さまざまな理由から、やがてイスラム教を自分たちの宗教として受け入れた。シリアの既存のエリートたちは、新しい支配者によって排除されるどころか、イスラム教に改宗したか否かにかかわらず、しばしば新しい政治に組み込まれ、やがて新しいエリートたちを支配するようになった。風刺画に反して、ヨーロッパをキリスト教化するために採用された強制改宗は、イスラム教徒のシリアではまれだった。

（親しみを込めて言えば、イスラエルのお調子者は常々、「パレスチナ」という用語はローマ帝国とともに消え去り、1920年代にイギリスが「発明」するまで再登場しなかったと主張している。実際、多くの例があるが、カリフの軍事地区のひとつは「フィラスティン」と名付けられていた。むしろ、ユダ

ヤ人社会がこれらの領土に残っていたにもかかわらず、永久に使われなくなったのは「ユダヤ」であった）。

イスラム第二のカリフ、ウマイヤ朝（661-750）はダマスカスに首都を置いた。ウマイヤ朝は、行政から建築に至るまでビザンチンの伝統を重んじ、さらに遠くから影響を受け、それらを自国のものと融合させながら、制度、統治形態、商業や科学などの分野での新しいアプローチを発展させた。

[ウマイヤ朝カリフに関する標準的な入門書は G. R. Hawting, *The First Dynasty of Islam: The Umayyad Caliphate 661-750* (1986) を参照。]

ウマイヤ朝がアッバース朝によって退位させられた後、イスラム帝国の重心は東のバグダドか西のカイロに移ったが、これらはダマスカスとは異なり新しい都市であった。12世紀、イスラムの武将でありアユーブ朝の初代スルタンであったサラ・アルディン・アル・アユビー（サラディン）がエジプトとシリアを統一したことで、シリアは再び脚光を浴びることになる。

クルド人出身のサラディンは、クルド人がすでに古くから存在したシリアではなく、むしろイラクの出身だった。サラディンはシリアから十字軍を倒す最後の作戦を開始し、1187年に聖都を十字軍の支配から解放した。サラディンの名は騎士道の代名詞であり、実在の人物だけでなくサラディンにまつわる神話上の行為もある。サラディンはダマスカスの堂々たるウマイヤド・モスクに埋葬されており、キリスト教とイスラム教の伝統によれば、洗礼者ヨハネの首もここに埋葬されている。

[『サマルカンド』や『レオ・アフリカーヌス』などの歴史小説で知られるアミン・マールーフは、この時代について、主に同時代の証言から描かれた『アラブの目から見た十字軍』（1989年）という魅力的な歴史書も書いている。]

13世紀、シリアは再びエジプトを拠点とする支配者たち、この場合は奴隷兵士のカーストであるマムルーク家によって支配された。半世紀にわたってパレスチナのアイン・ジャルト、シリアのホムス、オロンテス川流域で繰り広げ

られた数々の戦いで、マムルーク朝は 1258 年にバグダッドを略奪したモンゴル軍を抑えることに成功した。

1516 年、アレppo近郊のマルジ・ダビクでの決戦後、新興のオスマン帝国はマムルーク朝スルタンに致命的な打撃を与え、バスラからアルジェまでのアラブ世界の大半をアナトリアとバルカンの支配下に加えた（モロッコ、スーダン、オマーン、アラビア半島内陸部はオスマン帝国の支配下に入らなかった主な地域）。ヒジャーズのメッカとメディナ、そしてエルサレムは、その宗教的地位から最大の重要性を持っていたが、ダマスカスとアレppo、そしてカイロは、オスマン帝国の新領土で最も重要な都市を形成することになる。

オスマン帝国初期のシリア州は、マムルーク朝の前身に相当し、大シリアの大部分を占め、ダマスカスから統治されていた。とはいえ、オスマン帝国時代の大半はアレppoがより著名で裕福な中心都市地であった。治安と行政の改善、広範な公共事業、貿易網の拡大により、オスマン・シリア全土で大幅な経済成長と農業生産の増加がもたらされた。アナトリアとペルシャを拠点とするライバル帝国間の対立は続き、今度はオスマン帝国とサファヴィー朝イランの間で争われたが、シリアにとって幸運なことに、彼らの戦争は主にイラクで行われた。

[今年初めに 93 歳で他界した著名なシリア人歴史家アブデル・カリム・ラフェックは、オスマン・シリアに関する代表的な研究のひとつ『ダマスカス州、1723-1783 年』（1966 年）を出版した。Jane Hathaway, *The Arab Lands Under Ottoman Rule, 1516-1800* (2020) は、シリア／大シリアについて幅広く論じている。]

19 世紀以前、オスマン帝国のアラブ地方における統治は、かなり分権化されていた。総督やその他の高官はイスタンブールによって直接任命され、歳入は主に租税耕作によって生み出された。租税耕作とは、特定の土地、商品、取引から税金を徴収する権利を国家が競売にかけ、国庫に一定額を納めるというものである。

オスマン帝国は 19 世紀まで、支配下にある人々を市民ではなく臣民として扱っていたが、宗教の違いによっても社会を組織していた。イスラム教徒は法的に特権的な地位にあった。宗教的少数派に関しては、スルタンはそれぞれの共同体から宗教的指導者を任命／承認した。これらの指導者は、それぞれの共同体の問題を、その共同体独自の法律、伝統、裁判所に従って組織し、共同体のスルタンと国家に対する忠誠を確保する責任を負っていた。

19 世紀後半になっても平等が実現したとは言い難いが、かなりの自治が認められ、これらの共同体と国家の両方の利益に貢献した。全体として、シリアの宗教的少数派とユダヤ人は、この時期、ヨーロッパの少数派よりもはるかに有利だった。

19 世紀は、中東における大きな変化と混乱の時代であった。近代エジプトの創始者とされるアルバニア出身の総督ムハンマド・アリ・パシャが率いたオスマン帝国の宗主権に対するエジプトの反乱により、大シリアは 1831 年から 1840 年までエジプトの支配下に置かれた。ムハンマド・アリの息子であるイブラヒム・パシャが率いるエジプト行政の有効性、特に税制と徴兵制度は、広範な反発を招いた。

これは、1834 年にパレスチナで勃発した農民反乱に結実し、瞬く間に社会の他の部門やアレppo州にまで広がった。エジプトとの交戦は、最終的に住民のオスマン帝国への忠誠心を強めると同時に、地域のアイデンティティを強化した。

[ちなみに、イスラエルの学者バルーク・キンマーリングとジョエル・S・ミグダルは、その著書『パレスチナ人の形成』*The Making of a People*』（1998 年）の中で、パレスチナ人の明確な国民アイデンティティの形成は、シオニズム運動やイギリス委任統治よりもずっと前に起こったこの反乱に端を発しているとしている。]

オスマン帝国におけるヨーロッパの影響力の増大とヨーロッパ間の対立、中央支配の強化と帝国の近代化を目的としたイスタンブール発の一連の行政・憲法

改革と相まって、この時期に、取るに足らない宗派間の区別が緊張関係へと変化し、最終的には暴力的な紛争へと発展した。

1840年、エジプトの支配が衰えつつあった頃、ダマスカス事件として知られているように、イタリア人修道士とそのイスラム教徒の助手が失踪した後、ダマスカスのユダヤ人は血の中傷にさらされた。フランス領事に扇動されたエジプト総督シャリフ・パシャは、必要な自白を引き出す前に、多くの著名なユダヤ人を投獄し、拷問して殺害した。

その年の暮れにオスマン帝国の支配が回復すると、当局はユダヤ人に対するでっち上げの中傷であるとしてこれを公に非難し、生き残った囚人を釈放し、シャリフ・パシャを処刑した。

その20年後、この街のキリスト教徒はさらに悲惨な運命をたどることになる。ロンドンとパリが異なるコミュニティを支援するだけでなく、それぞれの利益を定義し、促進しようとする英仏の対立関係の中で、1859年にレバノン山で起きた農民蜂起は、当初はマロン派の地主に対するマロン派キリスト教徒の農民によるものだったが、主に英国が支援するドルーズ派とフランスが支援するマロン派が対立する宗派抗争へと発展した。

前代未聞の宗派間の虐殺は、地元と外国の扇動が相まって、ダマスカスにも広がり、1860年7月には、8日間にわたって約5,000人のキリスト教徒が暴力の乱舞で虐殺され、多くの財産や施設も廃墟と化した。この時、ポルト準帝国は断固とした態度で介入し、説明責任と賠償を課し、長い間この地域のさまざまなコミュニティ間の関係を支配していた共存関係を回復した。これはその後のアルメニア人大虐殺におけるオスマン帝国当局の行動とは対照的だった。

[Leila Tarazi Fawaz, An Occasion for War: Civil Conflict in Lebanon and Damascus in 1860 (1995) and especially Eugene Rogan, The Damascus Events: The 1860 Massacre and the Making of the Modern Middle East]
(2024年)は、このトラウマ的なエピソードに関する優れた記述を提供している。これらのテーマをより広範に論じるために不可欠なのが、ウサミ・マクデ

イシの『共存の時代』である：エキュメニカル・フレームと近代アラブ世界の形成』（2019年）がある。]

19世紀後半、中東ではヨーロッパの政治的・経済的侵食が激化し、オスマン帝国の統治における中央集権化の加速した。また帝国のアラブ諸州の統治におけるトルコ人の支配の拡大し、多国籍帝国がトルコ国家に変貌すると認識された。バルカン半島、コーカサス、北アフリカにおけるオスマン帝国の領土喪失、ナハダ（アラブの目覚め）として知られるアラビア語と文化への関心の復活が、アラブのナショナリズムの出現の基礎を築いた。

アラブ民族主義運動には当初から著名なキリスト教指導者がいたが、欧米の宣教師によってこの地域に輸入されたイデオロギーが、アラブ・キリスト教徒によって開拓され、イスラム教に代わってこの地域の統一的な絆となり、彼らに完全な平等をもたらすアラビズムをもたらすという風刺画は、現実には通用しない。例えば、C・アーネスト・ドーンが実証しているように、シリアのアラブ民族主義者の第一世代にキリスト教徒が占める割合は、一般人口に占める割合に比して実際には低かった。さらに、イスラム近代主義者もその発展に大きく貢献した。アラブ・ナショナリズムのすべての形態が世俗的であったわけではなく、世俗的であったアラブ・ナショナリズムは、しばしばこの地域の文化におけるイスラムの卓越性を認めていた。

[この時期のシリアにおけるアラブ・ナショナリズムの展開については、*Philip S. Khoury, Urban Notables and Arab Nationalism: The Politics of Damascus 1860-1920 (1984)*を参照。]

アラブのナショナリストの中には、ドイツのロマン主義的ナショナリズムからインスピレーションを得た者もいた。例えば、シリアのイスラム教徒の家庭に生まれたサティ・アル・フスリは、アラブ人はイスラム教が出現するはるか以前から血、土、言語の絆で結ばれた民族であり、アラブの国民的アイデンティティにイスラム教徒の次元が入り込む余地はほとんどないと考えていた。ドゥルーズ派の家庭に生まれたシャキブ・アルスラン（レバノンのワリード・ジュンブラットの祖父）は、対照的にイスラム教をアラビズムの中心的な構成

要素であり、ナショナリズムの基盤であると考えた。言い換えれば、アラブ世界におけるナショナリズムは、他の国々におけるナショナリズムと同様、複数の形態をとっており、そのなかには矛盾するもの、あるいは相容れないものさえあったのである。

[ウィリアム・L・クリーブランドは、この2人の詳細な伝記を書いている：*The Making of an Arab Nationalist: サティ・アル・フスリの生涯と思想におけるオスマン主義とアラビア主義*（1972年）、『西洋に対するイスラーム』（1985年）：*シャキブ・アルスランとイスラーム・ナショナリズム運動*（1985年）。

シリア、特にダマスカスはアラブ民族主義の発展における重要な拠点として浮上し、エジプトを拠点とするシリア人の移民によって補完された。大シリアとイラク（そして時にはエジプトとヒジャーズ）にその願望を集中させ、北アフリカをその計算から除外する傾向があった（この点ではアルスランは例外であった）これらの支持者の活動は、アル・ファタートや、軍人のためのアル・アハドといった秘密結社において、より組織的な形をとった。しかし、第一次世界大戦までは、彼らの思想は限定的な支持しか得られず、政治に関与したシリア人の多くは、4世紀にわたって属してきた帝国に忠誠を誓うか、帝国内での地域自治と政治的自由の拡大を主張した。

第一次世界大戦はすべてを変えた。最も重要なことは、オスマン帝国が敗北し、1918年までにすべてのアラブ諸州を失い、1922年に消滅したことである。

(つづく)